

声が聞こえること

-重兼徹詩集『新装版爆発するゴロー/Life is cuticle!』を読む

ヤリタミサコ

★『爆発するゴロー』を読む

ここで取り上げる詩集は、20年前に出版された重兼の2つの詩集『爆発するゴロー』と『Life is cuticle!』を合わせて1冊にして再出版されたものだ。やしの実ブックスの村田活彦と村田淳子の尽力による。まずは『爆発するゴロー』から、「やしの実」（もしかしたら出版元の「やしの実ブックス」という名称はこれを意識したのかもしれない）短い作品を最初に紹介する。

やしの実

素手でやしの実

叩き割る感じで

あなたの事を

愛しとる

これが重兼らしさ爆発で、4行の小品ながらそのエネルギーがすごい。前半のドン・キホーテ的な無謀な勇敢さと、後半2行の率直さの、この落差が大きい。おまけに最終行の「愛しとる」という文科省教科書が採用する言語ではない、口語の持つ体温の熱さと含羞。この4行だけで、いわゆる難解とされる「現代詩」にケンカをうっていることがわかる。レトリックで読者をケムにまく現代詩から意識的に遠ざかり、ストレートな声の表現力を見せている。「素手でやしの実を叩き割るなんて、やしの実の殻は固いし痛いからできないよなあ」と読者に想像させておいて、後半の直球勝負で「愛しとる」という作者の声に、読者は応援したい気持ちになる。もしもこれが「愛してる」という表記ならば、絵空事の恋愛のように見えて、読者は他人事と感じるだろう。

重兼は意図的に現代詩と対立する立場で書いているわけではないが、結果的にそうなっている部分が大きい。最重要なのは、話し言葉としてのリズムやそれらが持つ、身体性・起爆力・展開力が最優先されていることだ。「クッキー」という、阪神淡路大震災を描いている詩を紹介する。

クッキー

(.....)

隣のばあちゃんのケースは箪笥の下敷き

五十メートル先にある学生寮一階のケースは二階の下敷き

五百メートル先のゴルフセンター向かいにあった家のケースは火事

「パリ、行かへんか?」というボケで成功したラッキーな奴が入った

阪急西宮北口駅前の「ホテル・パリ」のケースは全壊

更には、

レジ吹っ飛んで什器ドミノ倒しシャンデリアが床に落下して碎け散ったのは
俺の店のケース

高架下に高架が落ちたのは国道一七一号線のケース

道路が折れ四三号線にめり込んだのは阪神高速のケース

様々なケース

色々なケース

人それぞれのケース

ケース

ケース

ヤマダケイスケの家は大邸宅なんで何の問題も無かったよ

大震災の被害状況を語っているのだが、ラブホテルらしい「ホテル・パリ」の紹介ではくすぐるような笑いが入り、「ケース」「ケース」の連呼のあとに「ヤマダケイスケ」という人名を出して「ケース」の音でずっこけさせる。おまけに、「ケース」は被害状況のことを指しているのに、「ケイスケ」は被害なし、という逆転のノンセンスまで到達している。続いて、この詩のラスト部分を紹介する。

(.....)

振り返ると広田小学校の子ども達が追いかけてきていた
そしてティッシュペーパーでくるんだ包みを一つ手渡された

手作りのクッキーだった

子ども達はポリタンクを抱えたこの怪しい男にさえ笑顔でこう言ってくれたんだ

「頑張ってください」

クッキーは見るからに固そうで卵のふんわり感ミルク感バターの風味
というものが欠落していて
多分このクッキーは粉っぽくてばさばさした味なんだろうなと思った

そらそうやろう

水道もガスも止まってるんやから

一つたべたらやはり、卵のふんわり感ミルク感バターの風味
というものが欠落していて粉っぽくてばさばさした
理科室の味がして、涙が出た

九一一、戦争、拉致、核実験、殺人、強盗、詐欺、脅迫、裏切り、レイプ、痴漢、交通事故、自殺、多発する人災
阪神淡路、新潟、北海道、スマトラ沖、ニューオリンズ、止めようのない災害

こいつら目のあたりにするとやりきれへんし
はがい

けど

これから先何かしら壊れるケースに対して
何かをアイテムにして自分自身で立ち上がらんとしゃあないねん

例えば俺の
ケース

俺は今でも理科室味のクッキーひとつで、立ち上がらせてもらってるねん。

おおきに

一般的な詩の書き方であれば「理科室の味がして、涙が出た」で終わり、「九一一」以下列挙される災難からあと
は不要とされるだろう。短歌では作者の詠嘆を書くが、現代詩では書かないことが多い。そこを、重兼は「やり
きれへん」「はがい」「しゃあないねん」「もらってるねん」と関西弁のホンネばかりで攻めてくる。書き言葉が
持たない生な実感が、「理科室味」のリアルを支えている。

大震災で大きな建築物が被災した記述から、小学生と小さなものへ視点が移り、理科室味のクッキーという小
ささに収束する。そしてラストの「おおきに」という口語が、この詩全体を開かれた状態で終わらせている。当
然「ありがとう」では嘘くさくなる。これがベタな口語の良さだろう。

ここでは、書き言葉と話し言葉の乖離については触れないが、「おおきに」と「ありがとう」の違いが典型的な
例だ。とはいえ、関西弁使用者でない書き手が使うのはムリだが。

★『Life is cuticle!』を読む

タイトル詩は、1行詩で書かれている。

ライフ イズ キューティクル

君の人生をもっとさらさらにしたい

意味不明かもしれない1行詩。でも、イキオイだけは感じる。だけではない。この詩集では「You are beautiful!
I love you!」というフレーズが繰り返されていて、その語感界隈から「ライフ イズ キューティクル」とい
う1行詩が湧き出てくるのかもしれない。

では、この詩集からは「赤福餅太郎」という詩を紹介する。

赤福餅太郎

伊勢の名物、赤福の本店にて

俺達は座敷にあがって、赤福セット（赤福三つとお茶と塩こぶ）を注文した

お店の人が赤福をお盆に載せて持ってきた瞬間

俺は土下座をした

(……)

その瞬間

走った！

走った！

走った！

過去に向かって走った！

そりや無理かあ

だが奇跡って言葉があるだろう

俺は謝りたい

全てを謝罪したい

ありがとうと言いたい

ほっぺにちゅうっとキスしたい

君の髪の毛でサーフィンしたい

縋りを戻したいんじゃねえ

もう一度俺がこの世界で立つために

(……)

そう、あとは走るだけ

加速！ 加速！ 加速！

加速には自信がある

昔、ドーピングしとってん

そして、あの定職屋の前に用意された

バナナの皮でつるっとスリップして

タイムトリップ！

の筈であったけれど、止まった

……東京の鳩が邪魔をする

決意表明から挫折まで

七秒六二

これは、失恋から回復しようとする若者が決意してから挫折するまでの七秒強を描いた詩だ。このスピード感がたまらない。赤福から土下座、美しい髪のモト彼女（ライフ イズ キューティクルはこの彼女に由来するかもしれない）、奇跡を起こしたい、でもできなかつた、という帰結。なんともドタバタのバスター・キートンの喜劇のような気もする。

前詩集と同様に口語関西弁のオptyミスティックな語感が効果的で、「ドーピングしとてん」の意味と、あっけらかんとした開放性の落差に唖然とする。土下座から加速まですべて主觀による進行なのだが、最後の2行でその主觀を笑い飛ばすような「決意表明から挫折まで／七秒六二」という冷たい現実。過去へ遡ろうとしても現実の時間の壁を超えることはできないのだが、それでも主觀の熱意と思い込みの力は、これだけの無謀な暴走をさせるわけだ。

阪神淡路大震災直後の「自分自身で立ち上がるんとしゃあないねん」という自分への叱咤激励と、失恋後に「もう一度俺がこの世界で立つために」と気を取り直す気持ちとの類似性・相似性と、その実情とのギャップも背後に描かれている。どちらも自分で自分を立て直す心意気なのだが、前者は絶望や大きな挫折後のかすかな希望が誠実に受容されており、後者は失恋をやり直したいと焦る気持ちが主人公を疾走させる。人生にはどちらのケースも起こりうる。

★重兼徹の面白さとは

シチュエーションコメディのような、ちぐはぐさ、タイミングの悪さが行分け詩に展開されている面白さ。関西弁の持つ、8ビートを膝かっくんさせるような独特のリズム。読者の常識的な思考の基板を揺るがす展開。これらは確かに重兼詩の表面的特色だ。

そして叙述の次にイメージするのは、失恋の痛手をなんとか笑い飛ばそうとしたり、復縁を願ってみたり、彼女との思い出に感傷的になったり、ジタバタする若者の姿だ。それはそれで十分に苦くも甘くも辛くも青春だ。その次に見える風景が、人間愛だ。一読ではそのハデな動きに目が行くのでなかなか感じられないのだが、私は20年ぶりに再読して、あっ、と気付いた。20年前は劇画のような大袈裟な語彙によるアクションとスピードが楽しく、それだけでケッサクだと思っていた。が、実は心温かな人間愛に満ちている。重兼らしさとはヒューマニズムだ。

「スペースパイロットブルース」では、仕事で宇宙へ出張した後に帰宅したら同棲中の彼女がいなくなっていて、酔いにまかせて悪魔に魂を売り渡して自分は詩人になった、という自伝風の詩。「プリン」では、突然離婚届を突きつけて出て行く妻に対して、主人公は妻を引き留めることもできずに、情けない自分をどうすることもできずにプリンのおみやげを手渡す。2編ともに悲しみや怒りを表出できずに、結果としてはジェントルな態度しかできなかった、と、“とほほ”なオチ。

このエピソードを男女のすれ違いだけに限定して受け止めたなら、恋愛模様の一つにしか見えない。が、阪神淡路大震災後にもらった理科室味のクッキーが自分を立て直してくれた「クッキー」という詩をベースに考えてみると、自分を振った相手に対して「俺を詩人してくれてありがとう」という感謝、離婚には応じたくないのに結果はプリンを大事に食べて欲しいとしか言えない軟弱さ、この弱さが人間愛だろう。男女の怨念や情念を超える人間愛。恋愛から人間愛への移行は困難だと私は考えるが、どうも重兼は恋人や妻に逃げられても、スルリと人間愛に変成するようで、これは重兼の特技みたいだ。ただし20年前の作品から修正を経ていることなので、もしかしたら20年後にその要素が強まったのかもしれないが。

「クッキー」という詩では痴漢から核実験まで、身体や心が被害を受けてもサヴァイバルしようとする希望がテーマになっている。人間には、傷つきや悲しみから回復するレジリエンス（自己治癒力）があることを、重兼は笑いを交えて実感し肯定している。現実にはそんなこと考えないで本能的に書いている、という方が当たっているのだろうが、ここでは人間愛を20年ぶりに読み取った、と言っておく。